

定福寺・豊永郷民俗資料館・定福寺講堂 研修活動プログラム

1. 目的と背景

定福寺ではこれまで、祈りを中心として様々な取り組みを行ってきました。かつて定福寺には寺子屋のような教院、剣道場、経典など収蔵していた蔵がありました。盆踊りや祭りが境内で執り行われ、豊永郷の人々の集まる場所にもなっていました。近年では 60 年前よりユースホステルを併設し、若者たちがお寺の宿泊施設を利用することで、伝統文化に接する機会を設け、僧侶と話す機会などを提供してきました。また、宿泊者自らが提案をし、様々なプログラムを開発してきました。境内には宝物館や日本で 7 番目に開園された土佐豊永万葉植物園があり、四季の様子を楽しむために県内外からの観光客が訪れる場所となっています。

定福寺は豊永郷地域の住民や定福寺を訪れる人々の縁のお陰で存続してきました。寺院は「祈る場であり、学ぶ場であり、集う場である」ということが、定福寺の先師たちの記録や歴史、残された経典からうかがうことができます。

近年、祈る場所、観光の場所として利用されてきましたが、現代の視点で新たな取り組みや社会とのつながりについて、お寺で何が提供できるのか（お寺からの布施）を考えた結果、『学び・知る・考える・動く』ということに注目しました。これらの取り組みを定福寺、豊永郷民俗資料館、そして 2023 年度に完成予定の定福寺〇〇講堂を活用し、豊永郷文化を切り口として考える場を提供できればと考えています。

2. プログラムについて

現代社会では、「人材育成」のあり方について数年前から変容がみられます。『日経新聞』やその他の経済紙に企業の在り方について、人を育てることが重要だという記事が掲載されることが度々あります。

BRTでは、1970年代からコーポレートガバナンスに関する声明を公表してきており、1997年以降は企業の目的を株主利益の実現ととらえていた。しかし、その後、米国の多くの経営者は地域への貢献や環境問題への対処など、広く社会課題の解決も企業の目的ととらえるようになってきており、今回の声明はそのような変化を反映させたものである。

『週刊 経団連タイムス 2019年12月5日 No.3434』

20世紀は機械や工場などリアルな資産の蓄積が企業の競争優位や国の繁栄を左右した。これに対して21世紀のカギは無形資産だ。ソフトウェアや知的財産、のれんなどの「見えざる資産」と、それらを生み出す源泉の人的資本の重要性が決定的に高まるだろう。優れた人材を輩出する企業や国であり続ける必要がある。

『日経新聞』 2022年1月6日「社説」〈資本主義を磨く〉輝く人材を育てる企業と社会に

学習院大の宮川努教授の試算によると、国内総生産（GDP）に占める企業の人材投資の割合は欧米の1～2%に対して日本は0.1%と主要国で最低の水準だ。人への投資をコストと位置づける日本企業の意識がこの際立つ低率に表れている。

米シカゴ大のラグラム・ラジャン教授は「技術革新についていくためにも企業はもっと人に投資

しなければならない」と警鐘を鳴らす。

『日経新聞』2022 年 1 月 8 日「成長の未来図 (7)」

「公益」企業、米で増殖還元優先は株主本位か

「人類の豊かさとは何か。誰もが納得する指標を作れるかどうかは分からない。仮に生み出せたとしても、GDP に完全に置き換わることはないだろう。一方で GDP だけを信じるべきでもない。豊かさの捉え方が変わる中、信頼できる指標の再構築が求められている」
——どうしたらいいでしょう。

「もっと心の奥に目を向けるのはどうか。多くの人が精神的な落ち込みを抱えている。仕事は人々の生活を支え、アイデンティティを定義する重要な要素となる。重要なのは仕事をする中で『意義あることをしている』と実感できることだ。

『日経新聞』2022 年 1 月 14 日 成長の未来図 識者に聞く (4)「意義ある仕事の供給を」

マサチューセッツ工科大教授 アビジット・バナジー氏

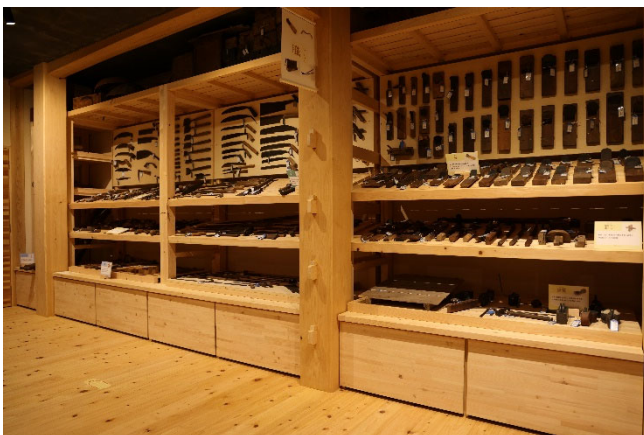
定福寺が提供する研修のテーマは、『学び・知る・考える・動く』ということです。各企業での研修は、各分野での実践的な取り組みが多いと思われます。各企業での実践的な研修や取り組みを草花の種や苗と考えると、定福寺が提供しようとするのは、土に関することです。土に関することというのは、耕すことかもしれません。または肥料のように新たな成分を加えることになるのかもしれません。定福寺の研修プログラムを通して、「違った視点の提供」ができればと考えています。

これらを実行するために、4つの項目に区分しプログラムを実行していきます。1つ目は豊永郷民俗資料館を活用するプログラム、2つ目は定福寺を活用するプログラム、3つ目はサッカーコーチングを活用するプログラム、4つ目は定福寺ユースホステルで行われていた修行プログラムです。また高知県のミュージアムネットワークとの連携も行い、様々な分野の学芸員とのコーディネート役割も果たす予定です。

2. 1. 豊永郷民俗資料館でのプログラムコンセプト

日々の生活の中で、あらゆることで考えさせられ、判断にせまられる場面に誰しも出会うことがあります。豊永郷民俗資料館での研修は、展示やコンセプトを基にして、少し違った視点を提供できればと考えています。

豊永郷民俗資料館は、豊永郷の人々が使用していた山村生活用具であり、昭和 30 年代から 40 年代に収集された民具です。約 12,000 点が収蔵されており、内 2596 点が重要有形民俗文化財の指定を受けていま



す。民俗学者の柳田国男は「郷土研究と郷土教育」の中で「我々は郷土を研究の対象としていたのではなかった。（中略）郷土を研究しようとしたのではなく、郷土で或るものを研究しようとして居たのであった」、「個々の郷土の生活を知ることは手段であった」と語っています。柳田の「郷土研究」を「民具学」に置き換えて、考えてもいいと『民具学の提唱』で述べているのが、民俗学者の宮本常一です。「民具研究の根本問題は民具の形態学的な研究にとどまらず、民具の機能を通じて生産、生活に関する技術、ひいてはその生態学的な研究に深いつながりを持つものである」と述べています。また宮本常一の師でもある渋沢敬三について、「渋沢敬三が問題にしたかったのは、民具そのものではなく、人々の生活そのものであり、しかも目に見えるものを通して古い生活を見ようとしたのではあるが、同時に生活が時間的経過の中で何が変わらず、何が変化していったか、また何故変化し、何故変化しなかったかということだった」と宮本常一は述べています。柳田国男も宮本常一も描いていた目的や方向性は違っていたのかもしれませんが、目的に向かうための手段は構造的に類似点があったのかもしれませんが。また民俗学者の谷川健一は柳田国男に対し敬意と批判の目を持って理解しようとしています。民具に関しても単なる古い道具、昔使われていた道具というだけではなく、多様な視点からとらえることが可能です。この多様な視点を持つということは、生活を楽しむ要素の一つだと思われます。

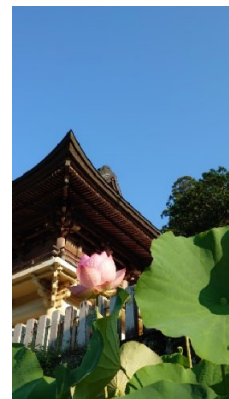
展示されている民具が使用されていた時代と現在との比較を、人と自然の関係、道具と技術の関係を切り口として話題を提供いたします。豊永郷の人々の自然とのかかわり方、考え方からみえる人や地域のつながり、残された風習から考えられることを知って頂くことで、現在を生きる私たちの日常とは違った視点で物事を思考するための要素の一つを提供しようとしています。

2. 2. 定福寺でのプログラムコンセプト

仏教について現代社会では、様々な印象を持たれていると思います。無宗教という言葉を目にしますが、日常の言葉や儀式など生活の中で仏教関連の何かと関わりを持たないということは、日本ではほとんどないと言われています。仏教は日常的な一面もあるということです。ある先生は、「仏教は、一般的な宗教という枠組みでとらえるよりも、「自己と世界の関係」を根本的に組み替えるための「思考－実践の体系」ととらえた方が本質をとらえやすい」と述べられています。つまり、宗教という枠組みではなく、自分と社会や自然との関係を見つめ直すための方法の1つと捉えると理解しやすいと述べています。

仏教の出発点は「生老病死」という苦に対する考え方をきっかけとして、あらゆる苦を取り除くための考え方や方法を追求してきた宗教といえます。最初にお釈迦さんが悟ったのは「縁起」と、苦の原因と結果、それに対処する方法とされています。

定福寺では「自分と向き合う」作業をきっかけとして、『学び・知る・考える・動く』ということに関して仏教的な視点からプログラムを提供いたします。



2. 3. サッカーコーチングより考える組織に関するプログラム

昭和を生活してきたスポーツ経験者の指導者の中には、自分たちの経験に基づいた範囲内で、根性と忍耐を中心とした叱咤激励を行う様子が見受けられます。根性や忍耐は、日々の継続の中で自らへの問いかけと周囲の理解とコーチングで養われるものであり、強い言葉や強制により根性や忍耐を備えるものではないと考えます。「思考と気づき」が重要な要素だと考えます。

国際サッカー連盟（以下 FIFA）に加盟している国は、国際オリンピック委員会（以下 IOC）に加盟している国より多く、世界中で行われているスポーツです。これまでの方針では勝てないことを知った日本サッカー協会（以下 JFA）は、選手の育成と同時に指導者の育成の重要性を唱えています。ライセンス制が導入されており、広く講義がなされています。

世界中のサッカーではコーチングの重要性やコーチングの仕方、暴言や暴力の撤廃について指導者に指導がなされています。すべてのコーチングは選手ファーストであり、選手育成とチーム強化が目的となっています。

サッカーは、自由なスポーツです。ルールの範囲内でどんなプレーを選択しプレーしてもいいです。よって選手は楽しくサッカーができます。指導者の重要な役割として忘れてはいけないことは、子供たちに「サッカーの楽しさ」を伝えることだとされています。子供たちに、常に試合に勝つことを意識させ、全力を尽くして最後までプレーをするように促すことは、指導者にとって大切な役割ですが、一方で指導者は、勝つことを望むのではなく、子供たちの夢を叶えるために、育成を中心に考えなければならないとされています。子供にとって何が大切か、何が一番良いのかを常に考え、基準は「Players First」でなければならないということです。勝つこと、勝とうとすることを大事にしつつ、次のステージへ引き継ぐための育成を大事にし、将来すばらしいサッカー選手になるための準備をする期間があると考えています。各年代によって考え方やプレーのレベルが上がりますが、楽しめる環境づくりは重要なことがわかります。

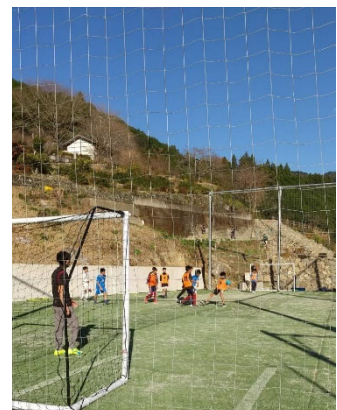
古い指導では、選手を育成することとチームを強化することは、真逆のコーチングのように考えられていると思います。元日本代表監督の伊ビチャ・オシム氏は、

「育てることと勝つことは矛盾しているようで、矛盾しない」

と述べています。子供たちは、放っておけば上手くなるということはありません。必要なことをしっかり身につけさせるための有効な働きかけと、コーチングが必要だと JFA では考えています。コーチの大事な役割として、子供の良いところを伸ばしていくために一番大切なことは、「うまくなりたい、こういうことができるようになりたい」と思えるように、子供たちの心に火をつけることであると述べています。

このような考え方を学ぶ事は、現代社会において企業の人材育成や強化に関しても有益だと思われます。

サッカーは「認知・分析・判断・行動」のスポーツです。定福寺の『学び・知る・考える・動く』という目的に即した研修プログラムを提供いたします。

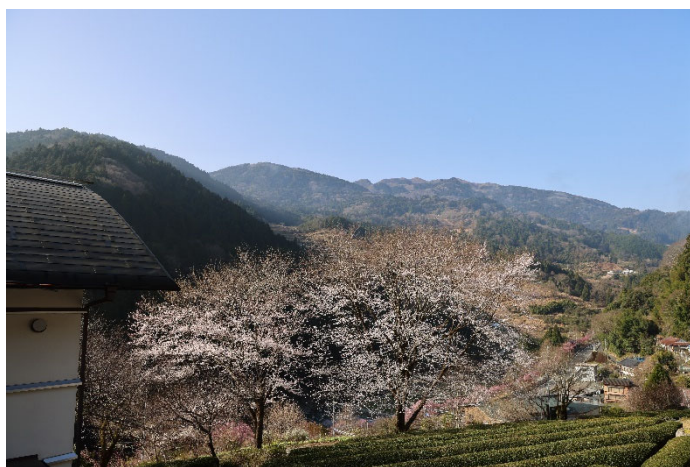
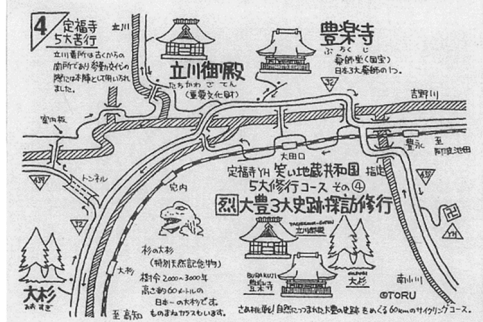
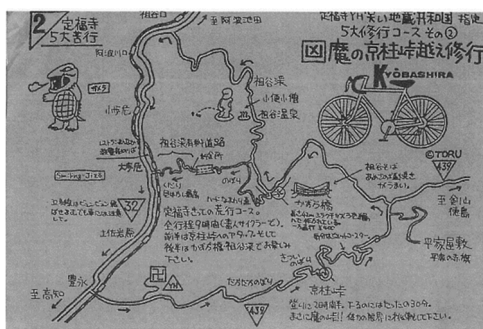


2. 4. 定福寺五大修行

定福寺境内で現在檀信徒会館として利用している場所は、約 55 年前からユースホステルでした。現在の建物は 55 年前の建物ということになります。

ユースホステルには多くの大学生や宿泊客が訪れ、様々なイベントをおこなっていました。その代表的なものに『五大修行』というものがあります。名前の通り 5 つの場所を巡るコースです。3 か所以上走破した人は定福寺のユースホステル名である「笑い地蔵共和国」より国民栄誉賞が贈られ、5 つすべて走破した人には人間国宝が贈られていました。また人間国宝の中から出身地によって大使に任命されていました。また宿泊者が笑い地蔵共和国のパスポートを持っている方は、入国ビザ出国ビザが押印されるシステムで宿泊割引などの特典がありました。

この五大修行のコースは、お互いに協力しながら完走するために、つながりやコミュニケーションができる環境でもありました。これを現代に復活させようとしています。定福寺〇〇講堂が完成した際には、すべての修行コースが行われるようになります。現在のプログラムとしては、最初に梶が森登山コースを設定する予定です。登山をすることで、チームワークや人間関係を築くきっかけを提供いたします。



定福寺から見た梶が森



3. プログラムの内容（一例）

それぞれ選択して受講可能です。

3. 1. 豊永郷民俗資料館

- （1）文化について（30分）
- （2）道具と技術について（40分）
- （3）豊永郷の歴史と産業（60分）
- （4）貨幣と価値観について（60分）
- （5）民具使用体験
- （6）豆腐作り

3. 2. 定福寺

- （1）仏教講座（90分）
- （2）般若心経講座と写経（60～90分）
- （3）仏像講座と写仏（60分）
- （4）瞑想（仏教）（40分）
- （5）作務（境内掃除）（60分）
- （6）住職好き勝手講演会（60分）

3. 3. サッカーコーチング

- （1）サッカーについて（30分）
- （2）育成と強化について（30分）
- （3）コーチングと選手ファースト、コーチの意識について（30分）
- （4）フットサル実技コーチング（60分～90分）

*これは（1）～（3）を受講した者のみ

3. 4. 五大修行

- （1）梶が森登山

定福寺～山頂（4時間）、龍王の滝～山頂（2時間） 龍王の滝まで車で30分

- （2）霧石溪谷トレッキング

通常コース： 定福寺～霧石溪谷（赤根）片道3時間

ロングコース：定福寺～霧石溪谷～岩原お堂（ガイド）片道4時間

- （3）大豊町史跡巡り（1日） *未定 交通手段の設定中（自転車）
- （4）京柱越え修行（1日） *未定
- （5）439号線走破（よさく走破）乗り物により時間は変化 *未定

3. 5. 日本文化体験

茶道（野点など）を体験することができます。

4. 異業種交流

これらのプログラムを異業種間で共に行えるようにすることも可能です。異業種間の交流は、様々な刺激があります。楽しく交流ができるプログラムになると考えます。

5. ミュージアムネットワーク

定福寺宝物館・豊永郷民俗資料館は、高知県の文化保存交流を行う博物館・美術館・植物園・動物園等が加盟するミュージアムネットワークとの連携も可能であり、様々な講師をお招きすることもできます。

6. 定福寺、豊永郷民俗資料館が参加する研修プログラムの事例 資料1

高知大学地域協働学部、高知大学希望創発センター

OTOYO 事業

OTOYO 事業は、高知県大豊町東豊永地区をフィールドとした、「東豊永希望創発プログラム」と「明日の社会の希望をになう人財プログラム」の2つからなります。

東豊永は全国的にも過疎・高齢化が顕著な地区ですが、そこに残る文化や風景は、私たちにとって今の日本社会を見つめなおし、これからについて思案するヒントになると考えています。

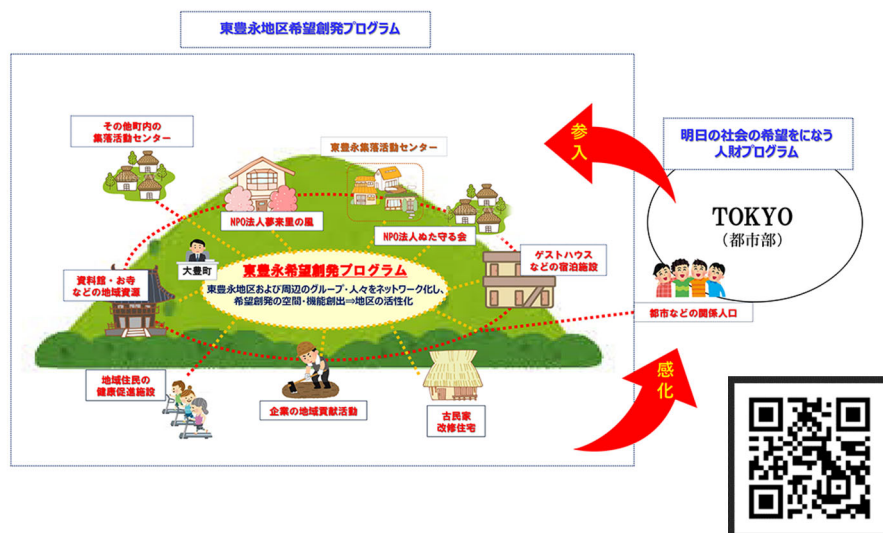
五感を通じて学び、地区や社会の活性に向けて取り組んでゆく。それが OTOYO 事業です。

東豊永希望創発プログラム

東豊永地区にあるヒト・モノ・コトを活用し、地区のコミュニティパワーを底上げするプログラムです。

東豊永は、四国山地の真ただ中に位置する、山村からなる地域です。「限界集落」と呼ばれるほど人口減少・少子高齢化が進む地域ですが、そこには厳しい自然環境の下でみられる人と自然、人と人、あるいは人と祖先とのつながりといった、現代の社会が忘れてしまった大切な関係が色濃く残っています。

プログラムでは、この地区で活動する組織（NPO・大学・企業など）や都市部の組織・人々をネットワークで結び、協働を進めることで地区を元気にしようと取り組んでいます。



明日の社会の希望をになう人財プログラム

明日の社会の希望をになう人財プログラムとは、東豊永地区のヒト・モノ・コトを教材とした合宿と事前事後のオンライン研修からなる人財育成プログラムです。

プログラムは、今日の産業社会を支える資本主義のあり方を課題としています。資本主義の精神の原点には、利潤の獲得を目指す「産業の論理」と、隣人愛の実践を目指す「人間の論理」の二つの中心がありました。ところがそれらは次第に反目しあい、人間の論理は追いやられ、変質した産業の論理が優先されるようになりました。

私たちは、「人のつながり」や「人の生きがい」といった人間の論理を取り戻すことが、社会をより良くしていくことに繋がると考えています。

東豊永地区は、産業社会では経済発展から取り残されてしまった「限界集落」ですが、ポスト産業社会においては、産業社会以前の“自然のあり方、人間の生き方”を学べる先進集落ともいえるでしょう。

本プログラムでは、豊かな自然のダイナミズムの中で「生きる（働く）意味」について考察し、「人間」中心のポスト産業社会の創造に向けた新たな気づきを得ることを目的としています。